

〈アジア神学セミナー 第5回〉
近代文学とキリスト教（事前配付資料）

しまださいし
明治学院大学 嶋田彩司

私の講義は二部構成とします。

まず第Ⅰ部は、はじめに近代日本文学とキリスト教の関係を概観します。そのための資料が下記1～7です。あらかじめ一読しておいてください。当日はこれに島崎藤村とキリスト教の関係について、『桜の実の熟する時』からの引用等の追加資料を配付し、お話しします。

第Ⅱ部は、第Ⅰ部を承けて、遠藤周作が日本のキリスト教と文学についてどのような考えをもっていたかについて、『沈黙』（1966年）をテキストにして考察します。その際、私の話は①、②として4～5頁に抄出した本文を中心に展開しますが、受講者の皆さんにはそれに限定することなく、本作に関連して自由に意見を述べてもらいたいと思います。

なお、①～⑯は『沈黙』に関連する遠藤周作自身の発言です。これも参考までにご一読ください。当日は、本作に関するさまざまな批評を追加資料で紹介します。

第Ⅰ部

1, 近代の日本文学は、この時期に移入した唯一の新しい宗教としてのキリスト教と対峙することを余儀なくされた。そのため、キリスト教につよい関心を示した作家は多い（芥川龍之介がよく知られている）が、さりとて狭義の「キリスト教文学」が生まれることもまたなかった。

近代文学者とキリスト教の関係を明らかにすることには困難がつきまとうが、その出発点である明治期の文学者とキリスト教の関わりには一定の傾向性があり、プロテスタントへの入信と離教を経験した作家が多い。評論家亀井勝一郎（1907～1966）はこの期のキリスト教を指して「明治の青春」という。

【資料①】『宗教学辞典』

日本の近代文学は、宗教、とりわけキリスト教との深いかかわりのうちに出発した。北村透谷、島崎藤村を中心とする『文学界』の同人たちは大半が受洗したキリスト教徒（略）であった。そうした明治期の青年の信仰指導者となったのは、植村正久、内村鑑三らであった。（略）しかし、かれらの作品においてはその信仰は定着しないまま、多くは教会から遠ざかった。

2, 日本近代文学は、一般に1890年前後に始まるとされている。1887年（明治20）の二葉亭四迷『浮雲』、1890年（明治23）の森鷗外『舞姫』、1891年（明治24）の北村透谷『蓬莱曲』等がその端緒である。

二葉亭四迷はキリスト教に激しい拒否を示した。森鷗外はヨーロッパ文明摂取の態度を自ら評して、「師」には会ったが「主」には会わなかったといい、近代化されつつある生活の後ろにあるべき「何物か」の欠如を指摘する。

【資料②】二葉亭四迷（1864～1909）、「余が半生の懺悔」、1908年

（当時よく読まれたキリスト教雑誌について）例の基督教的に何でも断言してすふ。たとへば、此世は神様が作ったのだとか、やれ何だとか、平気で「断言」して憚らない。その態度が私の癩に触る。

【資料③】森鷗外（1862～1922）、「妄想」、1911年

（ヨーロッパの文明を）譬へば道を行く人の顔を辻に立つて冷澹に見るやうに見たのである。冷澹には見てゐたが（略）度々帽を脱いだ。昔の人にも今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽は脱いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつたのである。

【資料④】森鷗外、同上

自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりゐるために、その何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。（略）背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。

- 3、北村透谷こそは同時代にあつてキリスト教を究理しようとした人物である。その所説は、神との感応による人の内的生命の再生にキリスト教の時代的意義を認めることを特質とする。しかし透谷は若くして自死し、その究理姿勢は継承されない。

【資料⑤】北村透谷（1868～1894）、『内部生命論』、1893年

畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。（略）この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。

【資料⑥】同上

明治世界の思想界に於て、新領地を開拓したる耶教一派の先輩の事業の跡を尋ぬるに（略）生命の木なるものを人間の心の中に植ゑ付けたる外に、彼等は何の事業をか成さんや。洋服を着用し、高帽子を冠ることは思想界の人を勞せずして、自然に之を為すなり。

- 4、透谷と文芸誌同人であつた島崎藤村は、植村正久のもと受洗するが、数年で離教する。離教についての藤村の言はじつに屈託のないもので、一読する限りにおいて、藤村にとってキリスト教は流行のファッションのよくなもとして、皮相的に受容されたにすぎないかのようなのであるが、一方で藤村は、晩年に聖書の勉強を夫人とつづけていたとも伝えられており、速断がためらわれるところである。

【資料⑦】島崎藤村（1872～1943）、『桜の実の熟する時』、1919年

お前はクリスチャンか、とある人に聞かれたら（略）洗礼を受けた時分の同じ自分だとは答へられなかつた。（略）では、お前は神を信じないのか、とまたある人に聞かれたら自分は幼稚ながらも神を求めて居るもの一人だと答へたかつた。あやまつて自分は洗礼などを受けた、もし真実に洗礼を受けるなら是からだ、と答へたかつた。

- 5、島崎藤村は「もし真実に洗礼を受けるなら是からだ」と書くが、実際にキリスト教に還ることはなく、一般

にはむしろ日本の伝統的宗教観へ帰順したとされている（この点については別途吟味する）。

そして、このようにキリスト教が受容され得ない日本の土壌について、キリスト教作家遠藤周作は、その作品において移植された草木の根を腐らせてしまう沼地にたとえている。

【資料⑧】 島崎藤村、『東方の門』、1943年（逝去により未完）

（近代の日本は）おのれの伝統と天性とに随つてその導くままに歩み行くことの出来るまでは（略）模倣の邪路に各自の身を曝すほどの危険をすら冒し進んで来たのである。こんな時代の空気の中へ基督教も入つて来た。

【資料⑨】 遠藤周作（1923～1996）、『沈黙』、1966年

この国は沼地だ。（略）どんな苗でもその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。（略）我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった。（略）日本人は人間を美化したり拡張したりしたものを神とよぶ。人間とは同じ存在をもつものを神とよぶ。だがそれは教会の神ではない。

6、近代作家離教の背景に、宗教と文学の宿命的な相反関係があることは否定できない。藤村らが師事した植村正久は、文学作品を宣教と護教の道具としてキリスト教への従属を要求する。その主張は一見、当事者としての北村透谷の苦悩と大きな乖離をみせている。内村鑑三においても事情は同様である。結果として正宗白鳥、国木田独歩らがその許を離れ、文学を選んだ。

【資料⑩】 北村透谷、「蓬萊曲」、1891年

おもへばわが内には、かならず和らがぬ両つの性のあるらし。ひとつは神性、ひとつは人性。このふたつはわが内に、休なき戦ひをなして（略）われを病ませ疲らせ悩ますらん。

◆植村正久（1858～1925）

「小説は最も多数の聴衆を所有せる説教者」（「実際と理想」）

「その目的と理想を道徳的にし、その事業をして道徳的の目的に副はしめよ」（「小説学の倫理」）

◆内村鑑三（1861～1930）

「成程源氏物語といふ本は美しい言葉を日本に伝へたものであるかもしれませぬ。併し源氏物語が日本の士気を鼓舞することの為に何をしたか。何もしないばかりでなく我々を女らしき意気地無しにした。あの様な文学は我々の中から根こそぎに絶やしたい」（「後世への最大遺物」）

「文の友よ…文若し汝を虚飾に誘はば取て之を捨てよ、至誠汝を動かすにあらざれば大思想大文学は汝のものにあらず」（「如何にして大文学を得ん乎」）

7、離教作家とされる正宗白鳥は、死に臨んで植村環（1890～1982）にみとられた。これをもって安易に白鳥のキリスト教回帰とすることはできないが、白鳥の内部になおキリスト教への親炙の感情が存在していたことは疑い得ない。藤村も離教後なお「神」を求めていると書き、キリスト教を嫌悪したとされる夏目漱石すら「神」に言及する。日本近代文学とキリスト教の関係については、受容／拒絶の二項対立的理解を超える視点の設定が必要だと思われるが、日本近代文学研究はまだその問いをたてたままで停滞している。

◆夏目漱石（1867～1916）、『道草』（1915年）

「彼は神といふ言葉が嫌いであつた。然し其時の彼の心にはたしかに神といふ言葉が出た」

第Ⅱ部

①『沈黙』本文（新潮文庫版 189～193 頁）

「二十年間、私は布教してきた」フェレイラは感情のない声で同じ言葉を繰り返しかえしつづけた。「知ったことはただこの国にはお前や私たちの宗教は所詮、根をおろさぬということだけだ」「根をおろさぬのではありませんせぬ」司祭は首をふって大声で叫んだ。「根が切りとられたのです」だがフェレイラは司祭の大声に顔さえあげず眼を伏せたきり、意志も感情もない人形のように、「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖い沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」

「その苗がのび、葉をひろげた時期もありました」

「何時」……

「あなたがこの国に来られた頃、教会がこの国のいたる所に建てられ、信仰が朝の新鮮な花のように匂い、数多い日本人がヨルダン河に集まるユダヤ人のように争って洗礼を受けた頃です」

「だが日本人がその時信仰したものは基督教の教える神でなかったとすれば……」……

「この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神だった。それを私たちは長い長い間知らず、日本人が基督教徒になったと思いきこんでいた」……

「彼等が信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日まで」フェレイラは自信をもって断言するように一語一語に力をこめて、はっきり言った。「神の概念はもたなかったし、これからももてないだろう」……「日本人は人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない。日本人は人間を超えた存在を考える力も持っていない」

「基督教と教会とはすべての国と土地とをこえて真実です。でなければ我々の布教に何の意味があったろう」

「日本人は人間を美化したり拡張したりしたものを神とよぶ。人間と同じ存在を神とよぶ。だがそれは教会の神ではない」

「あなたが二十年間、この国でつかんだものはそれだけですか」

「それだけだ」フェレイラは寂しそうにうなずいた。……

②『沈黙』本文（新潮文庫版 239～241 頁）

「わしはパードレを売り申した。踏絵にも足かけ申した」キチジローのあの泣くような声が続いて、「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハライツに参れましようが、俺のように生れつき弱か者は踏絵ば踏めよと役人の責苦を受ければ……」

その踏絵に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあった。私が幾百回となく思い出した顔の上に。山中で、放浪の時、牢舎でそれを考えださぬことのなかった顔の上に。…その顔は今、踏絵の木の中かで摩滅し凹み、哀しそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀しそうな眼差しは私に言った。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）

「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

その時彼は踏絵に血と埃でよごれた足をおろした。五本の指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈しい悦びと感情をキチジローに説明することはできなかった。

「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できよう」司祭は戸口にむかって口早に言った。

「この国にはもう、お前の告悔をきくパードレがいないなら、この私が唱えよう。すべての告悔の終りに言う祈りを。……安心して行きなさい」

怒ったキチジローは声をおさえて泣いていたが、やがて体を動かして去っていった。自分は不遜にも今、聖職者しか与えることのできぬ秘蹟をあの男に与えた。聖職者たちはこの冒瀆の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等を裏切ってもあの人を決して裏切ってはいない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの方は沈黙していたのではなかった。たとえあの方は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。

.....

(補助資料)『沈黙』に関連して

*遠藤周作のこぼれ①——「私とキリスト教」(1967年)

日本人ということと基督教の信仰というものは論理的に反するものではありません。信仰とは人種や国境を越えたものですし、その教えが普遍的なことも確かです。

けれども、私はほかの国に生まれたのではなく、基督教の伝統も文化も歴史も全くなかったこの日本に生まれたのでした。私の心の中にはこの基督教に浸されていないもの、むしろ基督教とは相反する感覚が、かくされていたことを、私は青年時代になってやっと気づいたのです。…

神に対して無感覚、罪悪感に対しても極端な考え方をきらう日本人がどのようにして本当の基督教信者となるかということは、私をながいこと苦しめていました。…先輩の作家たちの中にも基督教の洗礼を受けた人々のあるのを発見し…調べたことがあります。たとえば島崎藤村、たとえば正宗白鳥…というような人たちが若い頃、基督教に帰依したことは周知の事実です。けれどもこれらの人たちはやがて殆どすべてが、いつの間にかこの信仰から離れていくのです。のみならず、彼等は信仰を捨てた時、別に神にそむいたという苦痛感も罪悪感もありません。このことは私に基督教がこうした日本の知識人にも、根本的にくいこまなかった何かがあるのではないかと思わせるのでした。つまり彼等は若い頃、自分の中にひそんでいる、日本人としての反基督教的な感覚に気づかずに洗礼を受けたため、信仰が遂に本物とはならなかったのです。

私はまた多くの日本文学者や知識人がその人生の終りに、東洋的な諦めの世界、つまり汎神論の世界にはいつていく事実を考えました。この東洋的な諦念の世界こそはおそらく日本人のだれもが心の中に郷愁として持っているものですが、これこそ基督教とはもっとも相反したもののなのです。それは神の代りに大きな自然や、宇宙にそのまま吸いこまれていきたいという感覚です。

*同②——「誕生日の夜の回想」(1950年)

いかなる西洋の思潮といえど僕等の文学に移入される時には、まず、形而下的には日本の社会的地盤によって屈折され、更に形而上的には日本の汎神論的地盤によって溶解されてしまう。

*同③——『留学』(1965年)

私が知ったことは結局、シャルトルの寺院と法隆寺との間の越えがたい距離であり、聖アンナ像と弥勒菩薩との間にはどうにもならぬ隔りのあるということだけでした。外形はほとんど同じでも、それを創りだしたものの血液は、同じ型の血ではなかった。…我々は別の血液型の人からは血はもらえない。

*同④——「宗教と文学」(1963年)

日本人はやはり日本人として基督教の伝統も歴史も遺産も感覚もないこの日本の風土を背おって基督教を摂取していくことです。そうした試みがさまざまな抵抗や不安や苦痛を日本人の基督教信者に与えるとしても、それに眼をつぶらないこと。なぜならば、神は日本人に、日本人としての十字架をあたえられたに違いないのですから。

*同⑤——「小さな町にて」(1996年)

日本の風土には母の宗教—つまり、裁き、罰する宗教ではなく、許す宗教しか、育たない傾向がある。多くの日本人は基督教の神をきびしい秩序の中心であり、父のように裁き、罰し怒る超越者だと考えている。だから、超越者に母のイメージを好んで与えてきた日本人には、基督教は、ただ、厳格で近寄り難いものとしか見えなかったのではないか。

*同⑥——座談会「神の沈黙と人間の証言」(『福音と世界』 1966年9月)中の発言

ロドリゴという主人公が見つめて来たキリストの顔が、いわゆる背信の時に母性的なキリストの顔に変化する。…母性的なキリストということをもうちよっと西欧的な言い方をすれば、われわれの苦しみをいつもいっしょに苦しんでいるキリストという言い方をしてもいいでしょう。ですから、ロドリゴはそれを知るわけですよ。つまり、神は沈黙しているのではなくて、われわれといっしょに十字架を担ってくれているんだということをだんだん悟るわけですが、そういう苦しみをいっしょに担ってくれるという、沈黙の破り方は、基督教の教義にも反しないし、しかも日本人の感覚には向くんじゃないかと思ったんです。

同⑦——「異邦人の苦悩」(1973年)

『沈黙』という小説は…私にとって一番大切なことは、外国人である主人公が、心にいだいていたキリストの顔の変化である。(引用者補：当初は)西洋の芸術家たちが考えていたキリストの顔である。…しかしさまざまな困難や挫折のうちに(引用者補：見たものは)…秩序があり、威厳があり、力強いキリストの顔ではな

くて、くたびれ果てた、そしてわれわれと同じように苦しんでいるキリストの顔だったのである。

この顔の変化が私の『沈黙』の主題…この主題を見抜いてくれたのは江藤淳氏で…「この踏絵のイエスの顔は、日本の母親の顔である。…踏絵のイエスの顔の中には、遠藤氏と母親の関係が描かれている」ということを書いてくれたとき、私は長い間、自分が母親から着せられた洋服（引用者補：下記⑧参照）と、どのような戦いをしてきたかということが…見破られたなと思った。

私の考えている宗教というものには、二つの種類がある。

それはエリック・フロムの言葉を借りれば、一つは父の宗教であり、一つは母の宗教である。父の宗教というのは…人間の悪を裁き、罰し、怒るような神である。母の宗教というのは…母親ができたのわいの子供に対してでもそうであるように、神がそれをゆるし、神が人間と一緒に苦しむような宗教である。いわば、『歎異抄』という善人も救われるなら、まして悪人も救われるというような、ゆるす宗教である。……

正宗白鳥氏が洗礼を受けたあと、そのキリスト教から次第に遠ざかっていったのにも、父の宗教に対する彼の不安感、あるいは距離感というものがかかっていたのではないか。……

嶋田補記：遠藤周作は1923（大正12）年3月27日に東京巢鴨で生まれる。父常久は安田銀行のエリートサラリーマンであり、母郁子は東京音楽学校（東京芸大）卒で、毎日バイオリンの練習ばかりしているような女性だった。一家はやがて大連に移住する。成績優秀であった兄（帰国後、「灘中始まって以来の秀才」といわれた）と対照的に、周作は小学校では作文以外すべて乙であり、雨の日にも傘を差して花壇に水を与えるような愚直な子どもであったというが、母だけは「あなたは大器晩成よ」と励まし、初めて書いた作文が大連新聞に掲載されたときには大喜びし、その記事を亡くなるまで大事に持っていたという。

やがて父母は不仲となり離婚、母と兄弟は神戸の姉（伯母）を頼って帰国する（10歳）。熱心なカトリック教徒であった伯母の勧めにしたがい母子は受洗（11歳）、やがて母は「むかしたった一つの音をさがしてヴァイオリンをひきつづけたように…たった一つの信仰を求めて、きびしい、孤独な生活を追い求める」（「母なるもの」）ようになる。中学生の遠藤周作はこれに反発し、母を悲しませる。

19歳の時、母に経済的な負担をかけないために父のもとに身を寄せるが、母を「裏切った」といううしろめたさを感じたという。これ以降、遠藤周作のなかで母への思慕は募りつづけ、「かつて母について恨めしく思ったことも懐かしさに変わり、その烈しい性格まで美化」（『影法師』）していったと述べている。

これらを踏まえて江藤淳（1932～1999）は、『成熟と喪失 母の崩壊』（1967年）のなかで、母を捨てた父への憎悪が教会の父なる神への反発と母なる神の造形に結びついていると指摘している。



*同⑧——「合わない洋服 何のために小説を書くか」(1967年)

私は初めて自分が伯母や母から着せられたこの洋服(引用者補:キリスト教)を意識した。洋服は私の体に向いていなかった。ある部分はダブダブであり、ある部分はチンチクリンだった。そしてそれを知ってから、私はこの洋服をぬごうと幾度も思った。まずそれは何よりも洋服であり、私の体に合う和服ではないように考えられた。私の体とその洋服との間にはどうしてもならぬ隙間があり、その隙間がある以上、自分のものとは考えられぬような気がしたからである。…だがその時でさえ、私はその洋服を結局はぬぎ棄てられなかった。私には愛する者が私のためにくれた服を自分に確信と自信がもてる前にぬぎすてることはとてもできなかった。それが少年時代から青年時代にかけて私をとにかく支えた一つの柱となった。

後になって私はもうぬごうとは思まいと決心した。私はこの洋服を自分に合わせる和服にしようと思ったのである。それは人間は沢山のことで生きることはできず、一つのことを生涯、生きるべきだと知ったからである。…

それはともあれ、私は今日まで、ダブダブの服を少しでも自分のものにしようと思って書いてきた。ある部分はやっと私の体にあいはじめたが、多くの他の部分はまだまだ丈が長く、そして重い。しかしこのことは私だけの文学だという気持ちが心の奥にないわけではない。

*同⑨——「異邦人の立場から」

病気のあいだは…カミサマのことばかり考えつづけていた。…ある夜、私は神は本当は存在していないのではないかという不安にとらわれた…二千年ものあいだ、神がいるものと信じてそのために生きてきた人間が無数にいる…しかしもし神などは人間がつくりだした架空の幻影だったとするならば、それらの人間はなんとコッケイな喜劇の主人公であったことだろう。私自身だって甲羅をぬごうとか、ぬげないとか考えつづけてきて三十数年を無駄にしてしまったのだ。…いよいよ最後の手術の時…手術場の厚い扉がしまった時…私ははじめてといていいほど口惜しい思いで自分の小説のことを思い出した。ああ、書きたいなあと思ったのである。

*同⑩——「異邦人の苦悩」(1973年)

私は三浦朱門とともに上智大学に行き、そしてそこで切支丹の専門家であるチースリック教授から、切支丹の勉強をはじめたようになった。しかしそのときの私の関心は、こうした踏絵を踏まないで、自分の信念を、あるいは思想を貫き通した人でなく、踏絵に心ならずも足をかけてしまうような、弱虫の連中のことだった。

(引用者補——同エッセイの別の箇所、遠藤周作は「自分が同じそのような時代に生まれたならば、踏絵を踏んだであろうか」と自問している)

私は多くの切支丹の本を読んだが、それらの中にも、またチースリック先生の教えてくれた講義にも、こうした弱者のことは一つも触れられておらず、ただもっぱら自分の信念を貫き通して、見事に殉教した強者のことが書かれてあるだけである。

そのときに、ここに長年私を悩ましてきたキリスト教と日本、もしくは自分とキリスト教の距離をうずめる何かがあるような気がしたのである。

また政治や歴史が、沈黙の灰の中でうずめてしまっている、こうした弱虫をもう一度その沈黙の灰の中から生き返らせ、歩かせ、彼らの声を聞くことが文学だと考えるようになった。

*同⑪——『沈黙』（単行本）「あとがき」（1966年）

数年前、長崎で見た摩滅した一つの踏み絵——そこには黒い足指の痕も残っていた——が長い間、心から離れず、それを踏んだ者の姿が入院中、私のなかで生きはじめていった。そして昨年一月からこの小説にとりかかった。ロドリゴの最後の信仰はプロテスタンティズムに近いと思われるが、しかしこれは私の今の立場である。それによって受ける神学的な批判ももちろん承知しているが、どうにも仕方がない。

次にこの小説のモデルである岡本三右衛門について少し書いておく。…彼は本名、ジョゼッペ・キャラ。シシリアに生まれ、フェレイラ神父を求めて一六四三年六月二十七日、筑前大島に上陸し、潜伏布教を試みたが、ただちに捕縛され…井上筑後守の訊問と「穴吊り」の刑をうけて棄教、一六八五年八十四歳にて死んだ。…

また第九章中の「…ヨナセンの日記」は…『オランダ商館日記』から、「切支丹屋敷役人日記」は『続々群書類従』中の査祿余録から抜萃し、書きなおしたことを付記しておく。

*同⑫——「父の宗教・母の宗教」（1967年）

断っておくが基督教は…父の宗教だけではない。基督教のなかにはまた母の宗教もふくまれているのである。それは…新約聖書の性格そのものによって、そうなのである。新約聖書は、むしろ「父の宗教」的であった旧約の世界に母性的なものを導入することによってこれを父母的なものとしたのである。新約聖書のなかに登場する作中人物の多くは…転び者の系列の人間であることに我々は注意したい。そしてペトロでさえカヤパの司祭館で基督を棄てたのである。鶏がなく時刻、彼も亦踏絵に足をかけたのだった。その時、夜のたき火の向うで基督のくるしい眼とそのペトロのおずおずとした眼とがあったのだ。

*同⑬——「異邦人の苦悩」（再出）

日本の中でキリスト者でありながら、キリスト教的な主題を小説の中で書くということは、かなり困難なことである。…私自身は長年したしんでいるために、すぐ感じられるようなものが、私の読者にはおそらく、キリスト教になれていないために感じられないであろうというような不安である。……

『沈黙』の中で、司祭が踏絵に足をかけた場面の最後の行に「そのとき鶏が鳴いた」と書いたとしても、私の読者は、それが聖書の中でペトロがイエスを裏切ったときに、三たび鶏が鳴いたという言葉を決して思い出してはくれないだろう。…単なる自然描写の一行にしか受け取らないかもしれない。

また私がキリストとか、イエスとかいうものを出す場合、それはもっと私の読者にとって、大きな距離感を感じさせて、ページを終わらせるかもしれない。

私は『沈黙』を書くまでは、それを防ぐためにキリストの眼とは書かずに…別の形で書く作業をやってきた。しかし、ある批評家が…キリストの眼だとは感じなかったと告白したとき…キリスト者であり、小説を書く者の技術的な困難さに考えこまざるをえなかった…

*同⑭——三好行雄との対談中の発言（1973年2月『国文学』）

（引用者補：作品末尾の「切支丹屋敷役人日記」中に「岡田三右衛門儀、宗門の書物相認め申し候」云々とあることに関連して）これは誓約書という意味だったのです。誓約書というのはもう一度、拷問にかけられて、また「私は転びます」といった誓約書です。しかし拷問にかけられたというのは、「私はやっぱりキリスト教徒です」ということを宣言したためです。「私はけっして棄てたのではない」と言ったために拷問にかけられ

たんです。私はこの誓約書を書かされたということを…「書き物」ということばで暗示しておったんです。

それからキチジローも聖メタルもっていて、処罰されます。だから、彼ら二人は転んでもまた立ちなおって、また転んで、ということを繰り返したのだと暗示しておきたかった。

*同⑮——加賀乙彦との対談中の発言（1999年「母なる神を求めて～遠藤周作の世界展」図録所収）

キチジローというのは主人公のセバスチャン・ロドリゴを見捨てて裏切ってしまうけれど、最終的には同じ牢屋にいるわけです。僕にとっては、最終的には同じ牢屋にいるということが、『沈黙』で言いたかったことのひとつです。なぜキチジローがいるんだろうということを書いてくれた批評家はなかったです「キチジローは私だ」ということを言ってくれる批評家は…いました。けれども最終的に同じ牢屋にいるという意味を考えてくれなかった。

*同⑯——佐藤泰正との対談中の発言「人生の同伴者」（1999年）

〈沈黙〉ということばを表層的にとると、たしかに神の〈沈黙〉になりますが、あの小説にも書いているように「神は沈黙しているのではない。私の生涯をとおして語りかけているんだ」という、つまり〈沈黙〉という表層的な形態をとっているけれども、その奥に神のささやきがある、語りかけがあるということと、背中合わせにして〈沈黙〉というのはできているのです。単に神は人間の苦しみに対して黙っているのだという「ロドリゴの問いかけ＝私の考え方」というふうには、あの小説は読んでほしくないというのが作者の希望です。

*同⑰——『沈黙』が谷崎潤一郎文学賞を受賞した際のスピーチ

私は、この小説を書いたために、いままで私に寛大だった多くの神父たちを悲しませ、多くの信者の怒りを買ってしまった。とくに留学以来親友だった一人の神父を傷つけ、絶交せねばならなくなったことはまことにつらいが、しかたがない。…

*同⑱——加賀乙彦との対談中の発言（1999年「母なる神を求めて～遠藤周作の世界展」図録所収）

カトリック教会の一部では遠藤の本は読んじゃいけないといわれていた。第二公会議の前だから、「沈黙」は鹿児島と長崎では禁書でした。僕は町田に住んでいたんだけど、教会では、神父さんの説教の時に、「沈黙」を読まないようにと言ったそうです。